2012 年 2 月

報道関係各位

社団法人日本能率協会
経　営　研　究　所

シナプスな考察 Vol.6

経営研究所のマネジメントに関する調査・研究をもとに、研究員の考察・意見をお届けします

「グローバル」意識の変化を見る

（社）日本能率協会が今年度実施した「当面する企業経営課題に関する調査」の中で、「グローバル展開の進捗度および重視度」に関して 1998 年時に尋ねた設問を再度掲載して調査を行いました。1998 年と比較した結果の背景を考察します。

１．1998 年よりポイント減となった項目

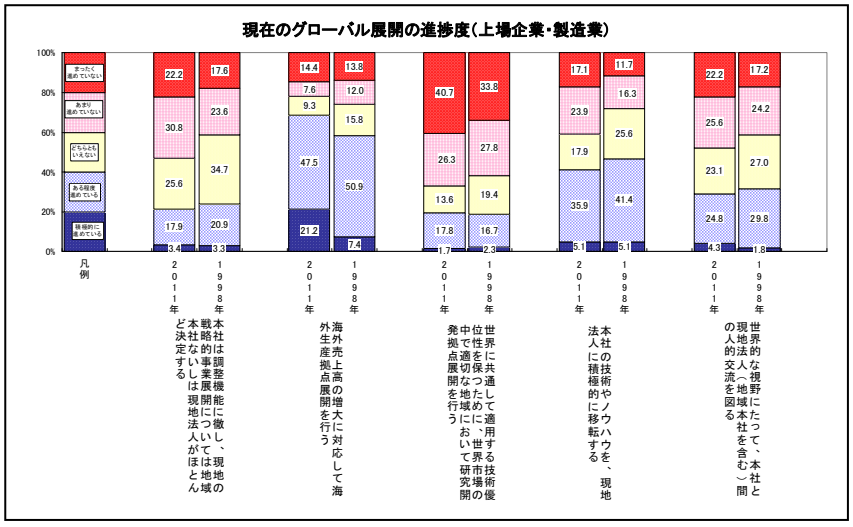
1998 年調査では上場企業・製造業のみに尋ねていたため、今年度の調査結果も同様の母数に絞って比較をした。その中から一部抜粋したものが右下のグラフである。

「海外生産拠点」は 2011 年の方が「進めている」率が高くなっている。別の設問で海外生産の 3 年前比率を尋ねているが、59.1%が「増加」と答えており、年々海外生産の割合が高まっていることがわかる。一方、「現地主導」、「開発拠点」、「技術移転」、「人事交流」については 1998 年よりポイント数が低くなる結果となった。この 4 項目はいずれも、1998 年時点で「将来（2010 年頃）」の重視度が一定数あったものであり、その割には進捗度が低いと見ることもできる。

２．グローバルの「あるべき姿」自体が高まった

この 1998 年時点の重視度と、2011 年時点の進捗度のポイント差は、10 年前と今とでグローバルの「あるべき姿」イメージが格段に向上したことにあるのではないかと思われる。

たとえばグローバルでの「人事交流」のあり方は、各現地から日本本社への行き来だけではなく、現地間での行き来、本社を含めた全体でのローテーション、または各現地にゆだねた人事など企業戦略に沿った多様な人材戦略が選ばれてきている。同業他社の動向、異業種からの参入、そして他国企業の一層の台頭など激しい変化がこの 10 年間で起こり、グローバルでの「あるべき姿」が軌道修正されたことから、現在の進捗度にも物足りなさを感じる度合いが高まっているのではないか。「あるべき姿」をビジョンや理念に照らして問い続け、それに対応した組織にし続けることが組織としての一貫性、継続性であろうと思う。今回の 1998 年との比較結果は、企業全体の意識の変遷のあらわれとも見ることができ、平均以上に「グローバル」への感覚・スピードを高めることが求められる。



以上

【本件に関するお問い合せ先】社団法人　日本能率協会　経営研究所（執筆：長沼明子）
〒105-8522　東京都港区芝公園 3-1-22　TEL：03-3434-6270　／Email：kadai@jma.or.jp
※本稿における誤りなどはすべて筆者個人に属します。
※取材のお問い合せは、広報グループ（担当：亀山／TEL：03-3434-8620）へお願いいたします。